

Tennessee Williams の *Escape* —1930 年代終わりか、1940 年代初めに 書かれた、反人種差別一幕劇—

落 合 和 昭

劇 *Escape* とその時代背景

Tennessee Williams (1911-83) の一幕劇 *Escape*、『脱走』の初演は、2005 年三月十七日、Tennessee Williams/New Orleans Literary Festival であった。この初演は、Williams の死後、二十年以上も経ってからの初演であり、書かれてから、おそらく、六十五年ほど経た後の初演である。

この劇では、舞台上に登場する、三人の「登場人物」全員が黒人であるだけでなく、舞台上には、一度も、登場しないが、脱走して、最後には、追い詰められて、追っ手によって、撃ち殺されることになる囚人も黒人である。じっさい、白人は、舞台上には、一人も登場しないにもかかわらず、その背後には、追っ手によって象徴されている、白人の高圧的で、暴力的な、激しい人種差別を、ひしひしと感じさせる劇である。Williams の劇の中でも、最も社会性の高い劇だけではなく、人種差別に対する、彼の静かなる挑戦を感じさせる劇である。

この劇が書かれた時期については、詳しいことはわかっていないが、2005 年に出版された、*Mister Paradise and Other One-Act plays* (この拙論は、この中に収録されている、*Escape*、p39-p43、をテキストとして使用している) の巻末に付けられている、NOTES ON THE TEXT の Notes to the Individual Plays の *Escape* の項に、

Our copy-text is one of two extant typescript drafts, filed together in HRC (4.10). *Escape* appears to be a product of the later 1930s or earlier 1940s, Williams's “apprentice” years.

(下線は引用者)

と書かれている(ちなみに、上記の引用文中、HRCはHarry Ranson Humanities Research Center, Tennessee Williams Collectionの省略であり、HRCに続く、括弧内の最初の数字と二番目の数字は、それぞれ、引用された資料が、現在、収められているボックスの番号とフォルダーの番号であることを示している)。(1) 1930年代の終わりから1940年代の初めにかけての時代と言えば、第二次世界大戦(1939-45)が始まるか始まらない時代から第二次世界大戦中の時代に当たり、Williamsの年齢に当てはめれば、この劇は、彼が、二十代の終わり頃から三十歳前後に当たる時期に、書かれたことになる。

この時代は、第二次世界大戦後の1950年代や60年代の公民権運動の時代よりも前であるので、言うまでもなく、南部では、慣習的に、激しい人種差別の嵐が吹き荒れていた。上に引用した、*Escape*の項の続きにも、

It would be pure speculation to assign a more particular date based on historical events, since the political reverberations of Scottsboro lasted from the 1930s through 1960s and into the present. Williams must have been thinking about the case in other writings including a story from 1931-2, “Big Black: A Mississippi Idyll” (posthumously published in *Collected Stories*) ; a revised and unpublished version of that story, entitled “Bottle of Brass” (see below); and an unpublished longer one-act play (probably from the late 1930 or early 1940s) entitled *Jungle*, at HRC (22.2) He would alluded to lynching and related issues again in his full-length play of 1940, *Battle of Angel*, and its later successors, *Orpheus Descending* and the film *Fugitive Kind*, An untitled short script filed in HRC (53.6) features two men in jail, Bum and Lem, who, though not Black themselves, discuss the fate of lynched Black men.

と書かれているように、Williams は、“Big Black: A Mississippi Idyll”、『大きな黒人、ミシシッピー牧歌』（1985 に出版されたが、じっさいは、1931-2 年頃に書かれたと思われる）、“*Bottle of Brass*”、「真鍮のビン」、(1931-2 年頃に書かれたと思われるが、未発表)、“*Jungle*”、『ジャングル』（1930 年代終わりから 40 年代初めにかけて書かれたと思われる）、“*Battle of Angel*”、『天使の戦い』（1940）、“*Orpheus Descending*”、『地獄のオルフェ』（1945）、映画“*Fugitive Kind*”、『逃亡者』（映画の邦題は『蛇皮の服を着た男』、映画は 1959 年に制作されたが、劇は 1937 年に書かれている）の中でも、南部の黒人差別を、程度の差はあれ、取り扱っている。彼は、習作時代から、劇作家として、黒人差別の問題に関心を持ち、上の引用文の中でも触れられているが、この劇が書かれた時期（1930 年代終わりから 1940 年代初めまで）をも含めて、アメリカでは、Scottsboro 事件という、人種差別があからさまに表面化したした事件で揺れていた。この事件は、1931 年に、Alabama 州 Paint Rock で、二人の女性を強姦したという理由で、九人の黒人の若者が、確固たる証拠もほとんどないまま、逮捕されたことから始まった。その後、この裁判は、二転三転どころではなく、四転も五転もしながら、やり直し裁判が続き、やがて、Alabama 州知事 George Wallace が、事件発生後、半世紀近くにもならんとする、1976 年になって、最後まで生き残ることになる、容疑者の一人 Clarence Norris に恩赦を与えた時までも続いた。しかし、それでも、明確な白黒はつかなかった、この事件の影響は、その後も続き、現在も、未だに続いていると言っても過言ではないだろう。南部の人種差別を語るとき、触れないではいられない出来事の一つである。この事件を、Williams の生涯に当てはめれば、この事件は、彼が、二十歳前後の、最も多感な時期（しかも、Williams は、この事件の被告とされた少年たちよりは、数年年上に過ぎなかった）に起こり、奇しくも、彼の後の人生の大部分と重なるような形で、マスコミを賑わしていた事件である。おそらく、この一幕劇 *Escape* を書いているときも、この事件の裁判が続いて、マスコミを賑わしていたことを考えると、Williams も、この事件に大いなる関心を持っていたことは想像に難

くない。いや、それどころか、Williams 自身、この事件に触発されて、この一幕劇を書いたとも考えられないことはない。

三人の「登場人物」

この劇は、ページ数にして、わずか五ページ、短いと言えば、あまりにも、短い一幕劇で、南部の収容所から脱走し、追っ手に追い詰められて、最後には、射殺され、遺体になって戻ってくる、黒人の囚人 Billy を描いた劇である。しかし、舞台上に、登場してくるのは、彼の、三人の囚人仲間 (BIG、STEVE、TEXAS) だけであり、Billy 自身は、一度も、舞台上には、登場してこないだけでなく、舞台裏から、彼の声さえも、聞こえてこない。しかし、この劇では、その Billy が、この劇の主人公であるかのような描き方がされている。一度も、舞台上には、登場せず、また、「台詞」が一つもない人物が、この劇の主人公であるのは、脱走した彼が、逃亡していく様子を、三人の同じ囚人仲間が、“The bunk-house”、「飯場」の窓から、視覚的に、また、聴覚的に、うかがいながら、語っているためである。そのため、Billy の逃亡の様子は、外の音や、三人の「台詞」を通してのみ、知ることができるので、まるで、ラジオの実況生中継を聴いているかのように、臨場感に満ち、ドキュメンタリー・タッチで、描かれている。

Billy が黒人であることは、三人の囚人の一人である TEXAS が、Billy を、

TEXAS: That nigger ain't got sense enough to be scared. (p39)

(下線は引用者)

“nigger” (黒人の蔑称) で呼んでいることから判断できる。さらに、囚人の一人、BIG が、TEXAS のことを、「台詞」、

BIG: If I pull a knife on you, black boy, you ain't gonna see it. It's gonna be buried too deep in your stinkin' hide. (p41)

(下線は引用者)

の中で、“black boy”と呼んでいることから、TEXAS も、黒人であることがわかる。しかし、BIG と STEVE に関しては、二人が、黒人であるかどうかについては、「ト書き」や「台詞」には、明確に、書かれていないので、判断できないが、当時の南部では、刑務所も、公共の場の一部であるので、他の公共の場所と同様に、おそらく、Jim Crow law (黒人差別の法律) が施行されていたと思われるので、黒人と白人は、“separate but equal”、「分離すれども、平等」ということで、別々の獄に収監されていたと思われる。そのため、Billy と TEXAS が黒人であるとする、同僚の BIG と STEVE も、黒人であると考えてよいだろう。また、この劇の冒頭に載せられている、「登場人物」欄には、

BIG	Fred Plunkett
STEVE	Jamal Dennis
TEXAS	Tony Molina

と記されていて、この劇の初演時の俳優、すなわち、上の右欄の三人の俳優、Fred Plunkett、Jamal Dennis、Tony Molina の全員が黒人であることから、初演時の、この劇の演出家 Perry Martin も、この劇の三人の「登場人物」全員が黒人であると考えていたことになるので、逃亡中の Billy は、もちろんのこと、三人の「登場人物」全員が黒人であると考えてよいだろう。

次に興味を引くのは、この劇の「登場人物」の名前づけ方である。BIG は、おそらく、身体が大きいために名づけられた、あだ名で、本名ではなく、別に、本名はあると思われる。STEVE は、当然、本名であろう。しかし、TEXAS は、とても本名であるとは思えない。まず考えられるのは、彼が、たまたま、生ま

れた土地が TEXAS であったために、TEXAS と名づけられたのかもしれない。このようなことは、この劇を観た観客が、それらの「登場人物」の名前を聞いたときに、すぐに、思い当たることかもしれない。Williams は、三人の「登場人物」の名前をつけるに当たっても、普通のアメリカ人の名前を使わないで、それぞれ、独自に、根拠のある、名づけ方をしている。名づけ方にしても、同じ基準を用いて、名づけていない。BIG は、身体づきから、STEVE は、本名で、TEXAS は、土地の名前から、名づけられている。

わずか五ページという、極めて短い一幕劇の中で、Williams は、この三人の「登場人物」を描写するに当たって、ほとんど、「ト書き」による性格描写をせずに、「台詞」のみを用いて、一人一人を個性的な人物として、描き分けている。これは、彼の他の劇の中でも、しばしば、見受けられることであるが、Williams ぐらい、ごくわずかな語数を用いるだけで、極めて個性的な人物像を創造することができる劇作家は、あまり存在していないように感じられる。彼の手にかかると、ほんのわずかな語数の表現で、読者（観客）の頭の中に、ある種の人物像が、明確な形で、再生されてくる。この劇の中でも、彼は、黒人を画一的に、例えば、「黒人（囚人）その 1」、「黒人（囚人）その 2」、「黒人（囚人）その 3」というように、十把一絡げで、描くようなことはしないで、その一人一人を、丁寧に描き分けている。当時の南部では、数分の一でも、厳密に言えば、たとえ、一滴でも、黒人の血が混じっていれば、外見が白人に見えようが、黒人に見えようが、黒人と見なされ、黒人は、白人に比べ、知能や知識を含めて、あらゆる面で、白人よりも、遥かに劣った人種であり、黒人は黒人、すべては、同じ黒人であると見なされてきた、長い歴史がある。しかし、この劇の中では、Williams は、三人の黒人、BIG、STEVE、TEXAS を、個性ある人物として、一人一人を、生き生きと描き分けている。その描き分ける、手始めとして、彼は、彼らの名前をつけるに当たって、それぞれ、異なる基準を用いているのである。

彼が、この三人を通して、どのような人物像を造り上げているかを、できる

だけ詳しく見て行くつもりである。

Williams は、冒頭の「ト書き」で、「場所」や「登場人物」について、

Scene: The bunk-house of a southern chain-gang, about twilight of a summer evening. It is lighted by a coal-oil lamp that swings from the ceiling is surrounded by a swarm of night insects. Outside we hear the song of locusts, faint and monotonous, and the distant baying of hounds. The group has a hunched, expectant appearance as they sit around the plain, bare wooden table. There is a deck of much-thumbed cards which they nervously finger throughout the play.

(下線は引用者)

と書いている。

この「ト書き」の中では、「時間」については、明記されていないので、はっきりしたことは言えないが、劇 *Escape* のその時代的背景の中でも触れたように、この劇が書かれた当時の「現代」、すなわち、1930年代の終わりから1940年代の初めにかけての時代であると考えてよいだろう。それは、第二次世界大戦開始前後から第二次世界大戦中の期間に当たる。一日の「時間」は、ある夏の夕暮れ時である。「場所」は、上記の下線部にもあるように、“The bunk-house of a southern chain-gang”、「南部の、鎖で繋がれた囚人たちが入れられた飯場」である。この「ト書き」から、“southern”、「南部の」と書かれているので、「場所」は南部であることは確かであるが、具体的に、南部のどこであるかまではわからない。しかし、「登場人物」の一人、BIG が

BIG: Sounds like they still down the East fork o' the Sunflower. (p40)

BIG: An'ole Billy's prob'ly swum back the west fork... (p41)

(下線は引用者)

と言っていることから、「場所」を、さらに、限定することができる。彼の言う、“Sunflower”は、おそらく、Williamsの生まれ故郷である、Mississippi州を流れている、The Big Sunflower Riverであることに、間違いないだろう。The Big Sunflower Riverは、The Yazoo Riverの支流であり、このThe Yazoo Riverは、Mississippi Riverの支流であり、The Mississippi Riverとは、同州のVicksbergで合流する。さらに、その「場所」を絞るには、上記の引用にもあるように、The Big Sunflower Riverが、“the East fork”、「東の流れ」、と、“the west fork”、「西の流れ」、すなわち、東と西の二手に分かれている地域の近くということになる。その地域は、Mississippi州の中部の西、Louisiana州やArkansas州との州境を流れるMississippi川の近く、Mississippi州のHumphreys郡、Sunflower郡、Washington郡の、三郡が交わるあたりであると思われる。ということは、Williamsは、彼の生まれ故郷である、Mississippi州を、劇の「場所」として選び、同州の人種差別を取り扱っていることになる。このことは、彼が、人種差別を、他人の問題とはとらえずに、まさに、彼が、今、直面している問題としてとらえていることの傍証となるであろう。

この「ト書き」の中で用いられている、“The bunk-house”、「飯場」は、その語句自体から、また、ここで、描写されている様子からも、造りが、あまりにも粗末な印象を与えているので、警察のような、公的機関の刑務所ではなく、私的な、例えば、奴隷制度が厳然として存在していた時代の南部の大農園主が、奴隷用に所有していた、粗末な奴隷小屋であるかのような印象を与える。Williamsは、囚人が、収監されている建物を、「刑務所」を意味する、‘prison’や‘penitentiary’を用いず、通常は、鉱夫や木こりなどが寝泊まりする場所である「飯場」という語を用いている。そのため、まるで、彼らが、不当に、重労働を課せられて、働かされ、しかも自由を奪われているような印象を与える。また、この、“a southern chain-gang”、「南部の鎖に繋がれた囚人たち」という表現も、彼らが、囚人であるというよりも、奴隷であるかのような印象を与える。しかし、じっさい、この劇を読み通してみると、この「南部の鎖に繋がれた囚人たち」は、奴隷ではなく、書かれていないが、警察に掴まった囚人であ

るように思われる。通常では、このような場合、この三人は、何らかの罪を犯したために、逮捕され、裁判にかけられ、刑が決定して、ここに収監されたと思われるが、劇の中では、彼らが、何の罪を犯したかについては、何も書かれていない。そのため、読者（観客）は、彼らが、ここに収監されていること自体、どこか理不尽で、不当な取り扱いを受けているのではないかという思いを抱くだろう。

この飯場の天井からは、石油ランプが垂れ下がっていて（この石油ランプも、その飯場が、電気の通っていない、人里離れた、辺鄙な場所にあるのではないかと感じさせる）、そこには、夜の昆虫が群がっている。外からは、かすかで、単調な、イナゴの声や、イヌの遠吠えが聞こえてくる。質素で、何も置かれていないテーブルには、三人の男たちが、背を丸めて、何かが起こるかもしれないと思っているような様子で、座りながら、落ち着いたかのように、手垢でまみれたトランプを、いじくっている。

Williams は、冒頭の「台詞」から、逃亡した黒人の囚人 Billy についてのやりとり、

BIG: You reckon he's got to the hollow?

STEVE: Naw, not yit.

TEXAS: It's my opinion he ain't gonna git very far.

BIG: We'll take your opinion faw what it's worth.

STEVE: Lissen them hounds.

BIG: I betcha that Billy ain't scared.

TEXAS: That nigger ain't got sense enough to be scared. (p39)

BIG: Shut up.

STEVE: Texas, cain't you evuh forgit a grudge?

TEXAS: I ain't holdin' a grudge. I'm pulling' faw him same's you all.

を通して、三人の考えの違いを、名づけ方が異なっていたように、明確に描き分けている。この中で、BIG は、追っ手のイヌが、Billy を追いかけて、迫ってきて、「ビリーは絶対に怖がったりはしない。」と言って、Billy は勇気あり、気丈な男であると褒め称えるようなことを言うと、TEXAS は、それに対して、彼自身、同じ黒人でありながら、黒人に対する蔑称、“nigger”を用いながら、「あの黒人は怖がる感覚さえも持ち合わせていない。」と、まるで、白人が、黒人に抱いている固定観念、偏見をそのまま吐露しているかのように、Billy は、怖がる感覚も、知恵もない黒人であると、軽蔑的に言うと、BIG は、すかさず、「だまれ。」と言って、明らかに、Billy を擁護している。この二人の争いの中に割って入るような形で、STEVE が、TEXAS に対して、「テキサス、恨みを忘れることができないのか。」と言っている。それは、以前、カード・ゲームをめぐる争った際に、Billy が TEXAS の尻を蹴飛ばしたことを言っている。それに対して、TEXAS は、「恨みなど持っていない。俺も、お前たちと同じように、彼の見方だ。」と言っている。さらに、STEVE は、冒頭の「台詞」で、BIG から、「彼(Billy)は窪地まで逃げられたと思うか。」と問われたとき、「いや、まだだ。」「イヌが吠えているのを聞け。」と言って、他の二人に注意を外に向けて、実態を、自ら把握するように促している。

この三人の中で、BIG は、Billy に対して、好意的、同情的な人物であるが、TEXAS は、軽蔑的で、冷笑的な人物である。それに対して、STEVE は、中間的な立場を取っているだけではなく、状況に対して、客観的な判断ができる人物として描かれている。その関係を簡単な図式にしてみると、

Billy「逃亡犯」
(自由への逃亡)

BIG (体型から名づけられた名前)	STEVE (本名)	TEXAS (土地から名づけられた名前)
Billy に好意的、同情的	BIG と TEXAS の仲裁者、客観的	Billy に軽蔑的、冷笑的

となる。この構図は、すなわち、考えの違いは、この三人の間のやりとりの中、繰り返し表れる。

次の BIG と TEXAS のやりとり、

BIG: I wish Billy ain't tried this here. It's taking too big a chancet. He on'ly had seven mo' months t' go.

TEXAS: It's like I said. He ain't got sense no mo'n a jack-rabbit.

BIG: Shut up.... (p40)

(点線部分は省略部分)

の中で、BIG は、Billy の脱獄に関して、悔やむ気持ちを持って、「ビリーはこんなことしなければよかった。あまりにも大きな賭をしすぎた。出所までに、あと七ヶ月だった。」と、いかにも残念だと言わんばかりに、同情的に言うと、TEXAS は、「俺が言ったとおりだ。彼は、ノウサギほどの分別も持ち合わせていない。」と、再び、Billy のことを、まるで、白人の差別的発言のように、能なしであると言わんばかりに、あしざまに言うと、BIG は、「だまれ。」と、再び、怒鳴る。ここでも、Billy に同情的な BIG と軽蔑的な態度を取る TEXAS が、再び、対比されている。続く「台詞」の中では、STEVE の客観性が示されている。列車が通り過ぎるような音が聞こえてきたので、BIG が、あれは、“Cannonball”、「弾丸列車(急行列車)」の音かと訊くと、STEVE は、BIG とのやりとり、

STEVE: Thunder. It ain't time faw the Cannonball yit.

BIG: How long?

STEVE: I figger it's twenty, thuty minutes yit till she be comin' thru'. (p40)

の中で、「雷だ。まだ、弾丸列車が来る時間ではない。」「それ(弾丸列車)が通り過ぎるまでに、二、三十分はあると思う。」と言って、BIG の質問に対して

も、前の「台詞」のときと同様に、客観的事実に重きを置いた答え方をする。STEVEは、このように、物事を客観的に見て、確かなことのみを中心にして話しをする人物として描かれている。また、BIGの、この質問の裏には、Billyが、うまく、この弾丸列車に飛び乗ることができて、逃げることができれば、という、強い思いが隠されている。

次の三人のやりとり、

BIG: Tha's too long.

TEXAS: Way too long

BIG: Shut up.

TEXAS: Shut up, you crepe-hanger. (p40)

の中で、BIGが、「それは(弾丸列車が来るまでに、二、三十分とは)長すぎる。」と言うと、それほど長いと、Billyはその列車に乗る前に掴まってしまうと言う気持ちを込めて、「あまりにも長すぎる」と心配げに言うと、おそらくは、TEXASは、この“Way”に、皮肉や嫌みを込めて、強調気味に、“Way too long”と言ったのだろう。この「台詞」から、皮肉と嫌みを感じとったBIGは、「だまれ」と怒鳴り、さすがのSTEVEも、腹を立てて、「だまれ、人の気持ちを踏みにじるやつだ。」と言う。ここでも、逃亡しているBillyに同情的なBIGと軽蔑的なTEXAS、その中に入って、TEXASを諷めるSTEVEの構図が見て取れる。

次の三人のやりとり、

BIG: An' ole Billy's prob'ly swum back up the west fork. He kin swim like a fish.

TEXAS: Dey prob'ly split up an some take de east fork an' some take de west. Cap'n ain't nobody's fool.

BIG: You gonna be somebody's cawpse if you don't shut up. (p41)

の中でも、BIG が、Billy がうまく逃げ切ることを期待するかのように、「ビリーのやつ、おそらく、西の流れを遡って泳ぐだろう。彼は、魚のように、泳ぐのがうまい。」と言うと、TEXAS は、「奴らは、二手に分かれて、東の流れと西の流れを行くだろう。(追っ手の) 隊長も抜け目がないから。」と言う。彼の言い方には、Billy が、追っ手の裏をかいて、逃げてもむだで、追っ手は、Billy よりも、ずっと頭がいいから、すぐに捕まるという意味をこめている。これを聞いた、BIG は、「黙らないと、死体になるからな」と切り返す。ここでも、Billy に同情的な BIG と軽蔑的な TEXAS の姿が見て取れる。このときも、STEVE は、BIG にトランプを一枚引くように言って、二人が陰悪になるのを押さえるかのように、間に割って入る。

STEVE が、BIG にトランプのカードを一枚引くように言ったのは、BIG と TEXAS の二人の仲裁に入るためと同時に、逃亡中の Billy の未来を占うためでもあった。次のやりとり、

STEVE: What you got?

BIG: Tray of clubs.

STEVE: Mmm.

BIG: What's that?

STEVE: Two hawses an' a wagon all of 'em black.

TEXAS: Oughta be four black spots includin' Billy!

BIG: If I pull a knife on you, black boy, you ain't gonna see it. It's gonna be buried too deep in your stinkin' hide. (p41)

の中で、STEVE は、カードを引いた、BIG に、「(引いたカードは) 何だ。」と訊くと、BIG は、「クラブの三」と答える。そのカードを見て、STEVE は、よからぬ予兆を見たのか、黙って、じっと考え込む。BIG は、彼の返事を待ちきれずに、再び、「それは何だ」と言って、カード占いでは、クラブの三が何を意味

するのか、尋ねる。STEVEは、二頭の馬と馬車、すべてが黒の」と答える。おそらく、ランプのクラブは色が黒であり、二頭の馬と一台の馬車で三ということになり、クラブの三は、黒い馬二頭と黒い馬車一台を指し、しかも、それは、黒であるので、不吉な兆候を暗示しているのであろう。すると、これをそばで見ていた、TEXASは、再び、「それは、Billyを含めれば、黒が四つということだ」と言って、Billyが捕まるに違いないとほのめかす。これを聞いた、BIGは「いいか、俺がナイフでお前を突き刺したとしても、(その動作があまりにも速すぎるので)お前の目では見えないだろう。それをお前の臭い身体へ深く突き通してやる」と、今まで以上に、強い口調で言う。ここでも、Billyに同情的なBIGと冷酷なTEXASが、さらに、強い形で、対比されている。

二人が言い争っているとき、再び、二人の間に割ってはいるような形で、STEVEが、外で、追っ手のイヌたちが、再び、騒ぎ始めたことに気がついて、知らせる。イヌたちは、西へ向かって、何か獲物を見つけたかのように、一斉に走り出す。遠く窪地のところでは、明かりが見える。おそらく、追っ手の懐中電灯であるかもしれない。近くには、列車が渡る橋がある。BIGは、Billyが、早く列車に飛び乗って、逃げるができるようにと願って、やきもきしている。

次のやりとり、

TEXAS: It's too late. They got him headed off now.

BIG: Shut yer goddam trap! (p42)

の中で、TEXASが、また、Billyの置かれている状況を否定的に、「もう遅すぎる。奴らはもう先回りしている。」と言うと、BIGは、「その忌々しい口を閉じている」と言って、激しく切り返す。ここでも、逃げてもいずれは、捕まるに決まっていると考えているTEXASの姿と、Billyには、何としても、逃げ切って、自由になって欲しいと望んでいるBIGの姿が対比されている。やがて、列車が勾

配へさしかかり、スピードを落として来たので、列車に飛び乗って逃げる、最大のチャンスがやって来たと思われた。しかし、そのとき、銃声が、続けざまに、計四発、聞こえてきた。おそらく、Billy に向かって放たれ、彼は撃ち殺されたと思われる。

次のやりとり、

TEXAS: He's packin' a gut full of lead.

BIG [*flashing a razor*]: Maybe you'd like to pack some of this!

TEXAS: Stay way frum me wit' that razor or I'll—

BIG [*advancing*]: You'll what?

TEXAS: Stay 'way frum me wit' that thing! (p43)

STEVE: Lay off him Big.

BIG: I'll carve my sign on his belly if I ever I git him out somewheres in the open! (p43)

の中で、TEXAS が、悪態をついて、「彼は腹一杯鉛玉を食らっている。」と言うと、腹を立てた、BIG は、「(カミソリをちらつかせながら) たぶん、お前はこれを食らいたいだろう。」と言って、脅しにかかる。TEXAS は、「カミソリを持って、近づくな、さもないと、俺は、、、。」と言うと、BIG は、さらに、「(進み出て) お前が何をするって。」と言って、さらに、前に出て、追い詰めると、TEXAS は、「それを持って、俺の方に近づくな」と言う。この一触即発の時に、再び、STEVE は、BIG に、「彼にかまうな」と言って、二人の中へ割って入り、仲裁をする。BIG は、「やつをどこか外の広いところへ引きずり出して、彼の腹に俺の印を彫り込んでやる。」と言いながらも、STEVE に従う。ここでも、Billy に好意的な BIG と、軽蔑的な TEXAS、二人の間に入って、仲裁をする STEVE の構図が見て取れる。

しばらくすると、トラックがやってきて、物資配給所のところに止まり、後ろから何かを運び出す。おそらく、それは、撃ち殺された Billy の死体であろう。

それを見た、STEVE と BIG は、そのやりとり、

STEVE: He's free, dat's how I look at it. Billy's free.

BIG: Yeah. He's free. (p43)

の中で、STEVE は、「彼は自由になった。俺はそう思っている。ビリーは自由になった。」と言う。それに、心から同調するように、BIG も、「ああ、彼は自由になった。」とつぶやくところで、この劇は終わっている。

結 び

逃亡囚人である、Billy の逃亡を中心にして、この劇は展開していく。しかも、この展開の様子は、三人の「登場人物」の異なる視点から、語られている。BIG は、Billy に対して、好意的、同情的な人物であるが、TEXAS は、軽蔑的で、冷笑的な人物であり、STEVE は、両者の中間的な立場を取っているだけではなく、状況を冷静に判断し、客観的な判断ができる人物として描かれている。Williams は、同時に、この三人のレンズを通して、Billy の逃亡を描いている。そのため、彼の視点は、BIG のように、好意的、同情的あり、TEXAS のように、軽蔑的で、冷笑的であり、STEVE のように、中間的、客観性を包含している。おそらく、当時、南部において、このような形で、黒人が脱走した場合、アメリカ人の反応は、大きく分けて、この三人の「登場人物」によって代表される反応と同じ反応を示すと感じたのではないだろう。彼が、この三つの反応を、代表させる「登場人物」を描き分けているということは、同時に、BIG のように、好意的、同情的にもならず、TEXAS のように、軽蔑的で、冷笑的にもならず、STEVE のように、中間的であり、客観的にもならず、それを越えた、視点を探そうとしていたのではないだろう。それは、Billy が、死を賭けてまで、手に入れようとした自由の視点ではないだろうか。

この劇の中で、逃亡中の Billy がどうなるかという思いが、観客(読者)の中で、

しだいに、高まっていくので、一種のサスペンスを味わうことができる。しかし、最後には、Billy は死体になって戻ってくる。STEVE と BIG は、その「台詞」の中で、Billy は、死体になったとき、初めて、自由の身になったと言ったが、通常、平等な社会においては、死体になることは、自由を意味しない。刑務所の中では、自由を奪われるのは、当然であるが、激しい差別社会では、刑務所の中と同様に、社会においても、自由は奪われているのである。生きている限り、自由は奪われているのである。それは、おそらく、終身刑を言い渡された囚人と同じような状態に置かれることである。彼らにとっては、刑務所を出ることが、自由になることではなく、死体になったときが、本当に自由になったときである。

Williams は、この劇を、第二次世界大戦開戦前後に書いた。当時の南部における状況でも、黒人が、劇の中で、同じ黒人が撃ち殺された姿を見て、これで、彼も、やっと、自由になれたと言わせること自体、たいへんな衝撃を持って、受け入れられたのであろう。彼が、三十歳前後で、この劇を描き上げていたにもかかわらず、生前に、発表も、上演もされなかったこと自体、南部の人種差別の根深さを、無言で、語っているのかもしれない。

おわり

テキストは、New Directions 版、

Mister Paradise and Other One -Act Plays by Tennessee Williams Edited , with an Introduction and Notes by Nicholas Moschovakis and David Roesell Foreword by Eli Wallach and Anne Jackson New Directions Publishing Corporation 2005
Escape, p39-p43

を使用した。

注

1. Harry Ransom Humanities Research Center, Tennessee Williams Collection. (The first and second numbers enclosed in parentheses following “HRC” designate, respectively, the numbers of the box and folder in which the materials cited are currently filed.))

参考文献

1. *A Dictionary of American History* by Thomas L. Purvis p361 (Scottsboro, case, first and Scottsboro, case, second) Blackwell Publishers Ltd 1995
2. 『黒人差別とアメリカ公民権運動—名もなき人々の戦いの記録』 ジェームズ・M・バーダマン著 水谷 八也訳 集英社新書 2007年